

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02450

研究課題名(和文) 近現代ベンガル語ベンガル文学の発展と現状

研究課題名(英文) The Development and Present Condition of Bengali Language and Literature

研究代表者

丹羽 京子 (Niwa, Kyoko)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：90624114

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：インドおよびバングラデシュにまたがって用いられる有力言語であるベンガル語とそれと一体をなすベンガル文学を包括的かつ中立的に捉えなおすために、国際ベンガル学会を本学で開催し、語学、文学に関連する様々な討議を行った。その成果をジャーナルのかたちでまとめたほか、学会後も国際ワークショップを開催するなど、多くの研究者と問題を共有するに至った。そうした際の提言も組み込んだかたちでまずは『タゴール読本』を作成、さらにはCEFR基準のA2レベルまでのベンガル語-日本語の語彙集を作成した上でこれを辞書のかたちに改めつつある。

研究成果の概要(英文)：Bengali, which is spoken in West Bengal of India and Bangladesh, is a major language in South Asia. The aim of this research is to reconsider the nature of the language as well as the literature which is closely connected with the language itself. We held the 4th International Congress of Bengal Studies at the Tokyo University of Foreign Studies and discussed thoroughly on various matters concerning language and literature. The result of the discussion was published as a journal. We also held an international workshop on Bengali poetry to discuss on the concept of "modern" literature. These discussions resulted into the "Tagore Reader". Besides, we are working on preparing Bengali Japanese dictionary which will be the first of this kind.

研究分野：ベンガル文学

キーワード：ベンガル文学 ベンガル語学 語彙集 辞書 文学史 タゴール ベンガル詩

1. 研究開始当初の背景

ベンガル語は東インド地域で最大かつ最も有力な言語で、ベンガル語圏は元来ひとつの文化圏を形成していた。さらに 1913 年にノーベル賞を受賞した詩人タゴールを擁した時代においてはインド亜大陸全体を牽引する存在であったと言える。しかしながら、1947 年の分離独立によってベンガルは東西に分断され、現在ではインドの西ベンガル州とバングラデシュという二国になっている。そのため分離独立以降は統合的な研究に乏しく、また、言語そのものが政治的イシューとなるなど問題をはらむこともあった。そうした背景にあって、標準ベンガル語を学びたいという非ベンガル語話者には不都合も少なくなく、それを解消したいと考えたのが本研究のひとつの発端である。また、文学研究者としては、東西ベンガルで文学史記述などに偏りがあることも鑑み、第三者として客観的中立的な視点に立てる強みも生かして、ベンガル文学研究に国際的な観点から貢献できる部分も少なくないことから研究に着手した。

2. 研究の目的

第一の目的は、常に一体となって発展してきたベンガル語とベンガル文学を総合的に展望することにある。まずは従来ベンガル地域のなかで終始しがちであったベンガル文学研究をひとりタゴールのみならず、タゴール以前および以後のものを含めて世界文学の一角を占めるものとして位置づけ、客観的な分析を行うことが求められよう。また、分離独立以降、文学史記述にも東西で違いが生まれてきているが、本来ベンガル文学は東西を問わず 1000 年にもおよぶ歴史を共有しており、それを踏まえて中立的かつ包括的な文学史記述をなすことは、単にベンガルにおける研究者のみならず、世界の文学研究者にとっても資するところがあると考えられる。

第二の目的は、分離独立以降のインド、バングラデシュ両国の言語政策を概観しつつ、包括的な「標準ベンガル語」を模索し、それを非ベンガル語話者が合理的に学ぶための道筋として提議することにある。具体的には綴りや発音、文法記述において若干の差違が認められるバングラデシュとインドのベンガル語をその差違も含めて合理的に学習者が学べる環境を作ること目標としている。言語に関しては歴史的な経緯より、現状に重きが置かれるが、できるだけ統合的な記述となるよう配慮する。

3. 研究の方法

まずベンガル文学史の包括的研究に関しては、東西の研究者の協力も得てさまざまな討議を重ねることが必要となる。初年度に計画された国際ベンガル学会をはじめ、国際ワークショップを開催するなどして多角的にベンガル文学を検討することが求められた。

その際、バングラデシュとインドの研究者からバランスよく意見を求めることも必要となる。そのうえで包括的なベンガル文学史記述に着手するか、もしくはその基盤を整備する。

ベンガル語関連については、やはり国際ベンガル学会などで東西で開きつつある綴りの問題などについて討議し、ベンガル語文法記述についてもあらためて精査する。その上で語彙集および文法書（もしくはハンドブック）を順次作成し、学習者の利便をはかる。

さらに文学関連のトピックをふまえ、重要な作品を収集した中、上級者向けのベンガル語読本も作成し、今後の研究の基盤とする。

以上、セミナーによる討議とそれをふまえた文学史、語彙集、読本の作成という基本的な作業を行うことが本研究の道筋となる。

4. 研究成果

まずは初年度である平成 27 年度に行われた第 4 回国際ベンガル学会において、大規模な発表と討議が行われたことが挙げられよう。この学会には、インドおよびバングラデシュから 200 人以上、世界のその他の地域からも多くの研究者が参加し、分野別に 50 のパネルが開かれた。そのうち言語学関連の 4 つのパネル、文学関連の 11 のパネルでは、本研究に関連するさまざまなトピックについての討議が活発に行われた。この国際学会の成果は、厳密な審査を経て International Journal of Bengal Studies, vol.10. にまとめられている。また、国際学会では基調講演として文学史に関する講演も行われており、ベンガル文学研究、文学史記述に関して多くの知見を得たのみならず、東西の研究者が協力して研究を進める基盤づくりにも貢献することができた。

さらに最終年度の平成 29 年度にはインドから研究者を招き、現代詩にテーマを絞ってワークショップを開催した。多くの事象が共有され、影響を与え合う「現代」においてのベンガル詩の立ち位置について活発な討議が行われ、得るところが大きかったと言える。

ベンガル語学に関連しては、語彙集作りが挙げられる。まず CEFR 基準の A2 レベルまでの語彙集を作成し、それをもとにベンガル語 - 日本語辞書の作成にまで踏み込んだ。ベンガル語辞書には、その重要度にもかかわらず、発音記号が一般的に併記されていないが、まずこれらを加え、さらに英語ベースで作成されていた CEFR 語彙では補足できていないベンガル語特有の語彙を加えた上で、語法や語句を含めた辞書のかたちに改めているが、この作業は完結していない。またベンガル語文法についても新たにまとめつつあり、最終的な辞書のかたちになる際に巻頭、もしくは巻末に加えるべく準備中である。

最後に読本であるが、当初予定していた 19 世紀以降全般を扱うものではなく、タゴールに特化した「タゴール読本」を作成した。こ

れは様々なセミナーや討論を通じて決定したことだが、その理由はベンガル文学のありようのみならずベンガル語そのものも「タゴール前」と「タゴール後」では大きく変化していることを踏まえてのことである。すなわち今あるベンガル語、そしてベンガル文学の潮流はかなりの程度タゴールによってその基礎が築かれており、それをまずまとめることが求められたのである。

最終的に完成した「タゴール読本」は 350 ページに及ぶもので、タゴールの詩篇から小説、戯曲、エッセイ類などを網羅し、人口に膾炙するものをほぼ収めていることから、ベンガル文化を概観するにも最適である。巻頭にタゴールについての解説文を付し、また詩篇、小説などのジャンル別にベンガル文学全般をふまえたタゴール文学の意義をとりまとめている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7 件)

1. 丹羽京子「歌の大地、ベンガル～パウロとコピガン」『総合文化研究』vol.21, 2018 年 2 月 pp.60-69.
2. Kyoko Niwa, *Japan Yatri as a travel literature*, *International Journal of Bengal Studies*, vol.10. January, 2018, International Society of Bengal Studies, pp.391-407. (査読有)
3. 丹羽京子「タゴール、ポスト・タゴール、エリオット」『東京外国語大学論集』第 95 集 2017 年 12 月 pp147-170. (査読有)
4. 丹羽京子「ビシュヌ・デの『地獄』」『東京外国語大学論集』第 94 集 2017 年 7 月 pp69-86. (査読有)
5. 丹羽京子「根無し草として生きる～シヨイヨド・ワリウツラとふたつの『赤いシャーラー』」『総合文化研究 vol.20, 2017 年 3 月 pp27-47.
6. Kyoko Niwa, *On Japan Yatri, Rabindranath Tagore and Japan, March*, 2017, Vishva-Bharati, Shantiniketan, pp17-27. (査読有)
7. 丹羽京子「百年前の日本への旅」『総合文化研究』vol.19, 2016 年 3 月 pp43-61.

[学会発表](計 7 件)

1. Kyoko Niwa, "Modernism in Bengali Poetry", *Modernism in Indian Poetry*, Tokyo University of Foreign Studies, 2018, 1, 20.
2. Kyoko Niwa, "Rabindranath racanar japani anubad samparke", Surendranath College for Women, Kolkata, India, 2017, 9, 15.
3. Kyoko Niwa, "Rabindranath's Short Poems with the Reference to Japanese Haiku", Asiatic Society, Kolkata, 2017, 9, 14.
4. Kyoko Niwa, "Women's Writings in Japanese Literature", Surendranath College for Women, Kolkata, India, 2016, 9, 2.
5. Kyoko Niwa, "On Japan Yatri", International Conference on Tagore and Japan, Visva-Bharati, India, 2016, 8.26-7.
6. 丹羽京子「根無し草として生きる シヨイヨド・ワリウツラと『赤いシャーラー』」総合文化研究所、2016 年 7 月 6 日
7. Kyoko Niwa, "Japan Yatri as a travel literature" The 4th International Conference of Bengal Studies, Tokyo University of Foreign Studies, 2015, 12, 12-3.

[図書](計 4 件)

1. 丹羽京子「タゴールとベンガル文学」『インド文化事典』丸善出版 2018 年 1 月 pp.126-7.
2. 丹羽京子「バングラデシュ文学～その過去、現在、未来～」『バングラデシュを知るための 66 章』明石書店 2017 年 10 月 pp.72-6.
3. 丹羽京子、書評・森本達雄編訳『原典で読むタゴール』南アジア研究第 28 号、2016 年 12 月 pp149-54.
4. 丹羽京子訳 『日本旅行者』R. タゴール 本郷書森 2016 年 11 月

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者 丹羽 京子 (Kyoko Niwa)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・
准教授

研究者番号：90624114